

## 論説

# 日本語の「南北型方言分布」の地理言語学的解釈 Geolinguistic Interpretation for the Japanese “North- South Distribution of Dialects”

安部 清 哉

### 【要 旨】

日本語の方言分布に見出した「南北型方言分布境界線」の地理言語学的境界の位置は、アジアの東では、中国語、朝鮮語それぞれの方言境界線に連続し、さらに、その成立要因には、西洋側のインド・ヨーロッパ語の二大語派 Centum-Satem の境界線とも共通性が認められた。また、言語現象（音声）においても、これら洋の東西において共通すると見なし得る特徴（音韻対応）が見出せた（安部 2013.3（『東洋文化研究』15））。

本稿では、それら一連の指摘のもとになっている日本語の「南北型方言分布境界線」の方言現象 27 分布図のいくつかについて、地理言語学的視点からの解釈を加えるものである。解釈の結果、この南北での対立的諸特徴としては、特に、語彙と音韻において、南・北それぞれの現象に顕著な傾向を認めることができた。特に、音韻では北方において唇音化、口蓋化、喉頭化等に関わる事例が多く、語彙では北方において特に寒冷気候に関わる現象が多く認められた。文法はまだ少ないが、北方での現象に「-aru 型動詞」の残存という共通性が認められた。南・北で一定の傾向が確認できたという点は重要である。従来指摘されてきた、いわゆる「東西対立型方言」における所謂《子音性優位 vs 母音性優位》、また、周圈型の 1 つである「外輪方言 vs [中輪+内輪] 型方言」における《総合的 vs 分析的弁別的》のように、南北型方言分布境界線の史的形成過程の解釈が、一層重要な研究課題であることを、改めて確認できたことになる。

（末尾に安部 2013.3『東洋文化研究』15 での音韻変化の解釈の修正を付す。「アメーサメ交替（雨）」交替の正体 [ $*k^h\text{ame} - \text{same}$ ] における [s] の発生の解釈：

正（修正後）=  $k^h (=k') > kj > k^*j > {}^k s^j > s^j > s$  ）

キーワード：南北型方言分布境界線、気候境界線、方言分布パターン、地理言語学的解釈、表日本裏日本分布

## 1 はじめに——南北型方言分布と言語学的意味

日本語の方言境界線として、東西方言境界線「糸魚川・浜名湖方言境界線」となると、もう1つ重要な境界線と考えられるのが、日本列島の方言を南北にわける境界線である（図I参照）。

その境界線は、日本列島だけではなく、アジアへも連続している方言境界線であった（Figure A）。また、その境界線と同様の背景をもつ言語・方言境界線は、ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語族の二大語派（＝方言）の Centum-Satem 境界にも見出せた（Figure B）。それゆえ、日本語のみならず、世界言語史レベルの視点から研究していく必要がある重要な言語史上の研究課題と考えられる。

この方言分布については、安部 1999.9 以降、いくつかの関連する報告をし（参考文献参照）、近年のものでは、安部 2013.2 で該当方言現象の一覧を提示し、安部 2013.3（『東洋文化研究』15）にてインド・ヨーロッパ語族の二大語派（＝方言）の Centum-Satem との共通現象を指摘した。

本稿では、それらの続編として、日本語方言の「南北型方言分布境界線」の言語分布 27 図について（安部 2014.3 より 2 図〈語彙⑬・音声⑨〉を追加）、地理言語学的視点から、簡略ながら史的解釈を加え、その共通する特徴について検討したいと思う。

「南北型方言分布」には、位置的な共通性のほかに、言語学的な類型的共通性が認められた（安部 2013.3）。本稿では、その分析をより深化させるために、言語地図を語彙・音韻・文法にわけて、個々の現象の特徴を考察する。言語地図によって以下の考察に繁簡があるが、本稿では、安部 2013.2 において全体的に指摘するのみであった語彙・音韻・文法それぞれの共通性や傾向の根拠を提示することに主眼をおいており、さらに詳しい個別の言語地図の解釈については、個別に後考を期したい。

「南北型方言分布」に関する定義、研究史、全体の諸特徴、課題など基

本的諸特徴については、安部 2013.2 において解説してある。また、研究資料として全図を掲載した安部 2014.3 でも諸特徴について追記し、言語地図も本稿より見やすい大判で掲載しているので、必要に応じてそれらを併せてご参照いただければ幸いである（【補注】参照）。本稿は、全図の提示を目的とした安部 2014.3 とは別に、まだ解釈を行っていない南北型方言分布地図のいくつかについて、地理言語学的解釈を新たに加えることを目的としたものである（解説の必要上、安部 2014.3 の図と一部重複するが、小さな判で地図を付載している）。

なお、南北いずれかに偏在するという特徴的パターンをもっているこの方言分布の境界線は、従来の「東西方言境界線」「糸魚川・浜名湖方言境界線」などと同じような名付けの 1 つとして、安部 1999.9 以降、「気候（境界）線」あるいは「南北気候境界線」と呼んできたものである。ここでは当面、日本列島上の位置的関係がわかりやすいように「南北型方言分布境界線」して使用していくことにする。

（なお、ここでの解釈の一部は、既に安部 2003.3 科学研究費報告書にて報告を終えているものもあるが、科学研究費報告書での研究はその後の活字論文での公表を妨げないとされるので、その後の研究も含め、ここに改めて報告するものであることを付言する。）

## 2 「南北型方言分布」の諸現象一覧(27 項目) (2013 年 11 月時点)

まず、南北型方言分布に該当すると考えられた方言現象を列挙しておく。安部 1999.9 で提示した南北型方言分布は、下記の語彙①～語彙④と文法④の 5 つであった。このうち、文法④のネマルについては、その時点では、気候の影響が明確であった他の分布例と同様に扱えるか判断を保留していた。その後の検討から、「古代動詞派生語形 [- aru 型] の残存分布パターン」と

いう現象の1つとして位置付けられた(安部清哉2008.3)。その類似例として、今回オガル・カクマを追加することができる。

さて、以下の語彙⑤以降は、その後の考察(安部2003.3 科学研究費報告書(語彙⑤～語彙⑩)、小林隆氏科学研究費研究会、安部2006.3、安部2008.3、安部2013.2、安部2014.3など)によって現在まで追加されたものである。項目毎の最後の研究者氏名・発表年や文献名は、その分布を最初に指摘したものか分布データ(地図・文献)を掲載する資料(その刊行年など)である。なお、分布地域の南北を、記号▲▼により、いわゆる北方▲(裏日本側)・南方▼(表日本側)として示す。地図の各番号は、通し番号で示した安部2014.3(『文学部研究年報』)とは異なり、ジャンル別にしてある。

□語彙(特に寒冷気候に関わる傾向)

語彙① ▲▼「シモヤケ(霜焼)」「▲ユキーシモ▼」(LAJ127 図「しもやけ(凍傷)」)(柴田武1962)

語彙② ▲「タツマキ・無回答(旋風)」[代用回答](LAJ264 図「つむじ風」)(真田信治1979)

語彙③ ▲「ノリツケホーサー・ノリツケホーソー(糊付干)」(LAJ298・299 図「梟の鳴き声」)(佐藤亮一1986)

語彙④ ▲「シミル(凍)」(LAJ97 図「(手拭いが)凍る」)(加藤正信1995)

語彙⑤ ▲「シバレル(凍)」(『日本方言大辞典』SDJDにより安部作図)

語彙⑥ ▲「フキ(吹雪)」(安部2001.3・安部2007.3, SDJD 安部作図)

語彙⑦ ▲「シガ・スガ(氷)」(LAJ261 図「氷」・262 図「氷柱(つらら)」)

語彙⑧ ▲風向名「アユノカゼ」(真田信治1989 掲載図より)

語彙⑨ ▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克1984)

語彙⑩ ▲▼地名「アラマチ(荒町<新町)」(鏡味明克1984)

語彙⑪ ▲▼「天の神様－神様」(選り歌の歌詞)(石井聖乃 2003)

語彙⑫ ▲感動詞「サーサ・サイ」(澤村美幸 2011)

語彙⑬ ▲▼「カナ(糸)」(▲カナ－▼イト)(LAJ153 図「糸」・156 図「木綿糸」)

□音声 (唇音化, 口蓋化, 喉頭化等の音声現象に関わる事例が多い)

音声① ▲▼「ボウ－オウ(追)」の〔唇音 bo－母音 o〕(唇音化)(LAJ147 図「鳥追い歌」・189 図「鬼ごっこ」)(安部 2008.3)

音声② ▲▼地名「bu－u 対応」〔budo 葡萄－udo・uto 宇藤・宇都〕(唇音化)(安部 2008.3)

音声③ ▲▼「キツ－ヒツ(櫃)」の〔\*kw－p 対応〕(唇音化, 喉頭化)(安部 2009.3)

音声④ ▲▼「スッカ－イスッパイ(酸)」の〔\*kw－p 対応〕(唇音化, 喉頭化)(LAJ41 図「酸っぱい」, 安部 2009.3)

音声⑤ ▲▼「アクド対ア(フ)ド(踵)」の〔\*kw－p 対応〕(唇音化, 喉頭化)(LAJ129 図「踵」, 安部 2009.3)

音声⑥ ▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化(ヒエ・ヘ)」(口蓋化)(「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑦ ▲▼「u<i(フガシ(東)・フゲ(髭))」(口蓋化)(LAJ11 図「東」・12 図「髭」, 鏡味明克 1984)

音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域/zɪ/」(口蓋化)とそれ以外の地域(「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑨ ▲▼開音合音の残存における母音の広狭の南北(▲開音が広母音 a: /ɔ:, ▼合音が狭母音 u:)(「日本方言音韻総覧」掲載図)

□アクセント

アクセント① ▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域▲と変化しない

地域▼ (口蓋性・唇音性?) (真田 1989)

□**文法** (現時点では「aru 型動詞」の残存という傾向が強い)

文法① ▲「ネマル」(LAJ51 図「座る」・52 図「あぐら(胡座)をかく」)  
(安部 1999.9)

文法② ▲「オガル(生育)」(\*ogu < obu 生ふ + aru) (『日本方言大辞典』  
での使用地域により安部 2007.3)

文法③ ▲地名「カクマ」(かくまる(囲) < 囲む + aru) (鏡味完二 1958)

文法④ ▼「下二段(語幹開音節)動詞の優勢残存」(平山輝男 1984 の図,  
安部 2008.3 指摘)

## 2 語彙における南北型方言分布の地理言語学的解釈

### 2-1 南北型方言分布の語彙 概観

まず、語彙的な現象を見る。

□**語彙** (特に寒冷気候に関わる傾向)

語彙① ▲▼「シモヤケ(霜焼)」(▲ユキーシモ▼) (LAJ127 図「しも  
やけ(凍傷)」) (柴田武 1962)

語彙② ▲「タツマキ・無回答(旋風)」[代用回答] (LAJ264 図「つむじ風」)  
(真田信治 1979)

語彙③ ▲「ノリツケホーサー・ノリツケホーソー(糊付干)」(LAJ298・  
299 図「梟の鳴き声」) (佐藤亮一 1986)

語彙④ ▲「シミル(凍)」(LAJ97 図「(手拭いが)凍る」) (加藤正信  
1995)

語彙⑤ ▲「シバレル(凍)」(『日本方言大辞典』SDJD により安部作図)

語彙⑥ ▲「フキ(吹雪)」(安部 2001.3・安部 2007.3, SDJD 安部作図)

- 語彙⑦ ▲「シガ・スガ(氷)」(LAJ261 図「氷」・262 図「氷柱(つらら)」)  
 語彙⑧ ▲風向名「アユノカゼ」(真田信治 1989 掲載図より)  
 語彙⑨ ▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克 1984)  
 語彙⑩ ▲▼地名「アラマチ(荒町<新町)」(鏡味明克 1984)  
 語彙⑪ ▲▼「天の神様－神様」(選り歌の歌詞)(石井聖乃 2003)  
 語彙⑫ ▲感動詞「サーサ・サイ」(澤村美幸 2011)  
 語彙⑬ ▲▼「カナ(糸)」(▲カナ－▼イト)(LAJ153 図「糸」・156 図「木綿糸」)

語彙①～語彙④は、すでに安部 1999.9 で先行研究も踏まえ解説しているので、ここでは最初に簡略に紹介するにとどめ、その後で、語彙⑤以下のいくつかについて新たに解説する。

これらのうち、語彙⑧～⑩を除く語彙①～語彙⑦に共通するのは、後で詳述するように、この位置における気候・気温の南北での相違の影響を受けているという点である。つまり、気候が大きな要因であることが顕著である。

語彙①「霜焼け」では、北部で「雪～」(～ヤケ・バレ等)、南部で「霜～」(同)になっていて、雪の多い地方とそうでない地方との差が投影している(柴田武)。

語彙②の「つむじ風」において、北部に「竜巻」の回答あるいは無回答が多いのは、雪の多いそれらの地域では、つむじ風の発生しやすい冬季に雪に覆われてしまい、その現象が少ないか目に付かないために、意味的に隣接する「竜巻」で代用回答されたり、無回答になったと解釈されているもの(真田信治)である。

語彙③の「梟の鳴き声」では、「糊付け乾せ」系統での「聞き成し」は冬季に晴天が少ない日本海気候の地域で「洗濯物を干せ」と聞き成したことによると解釈されている(LAJ 解説・真田真治)。

語彙④は、特に冬季の気温が低い地方で、「凍る」表現が独特の語形を共有しているものである（LAJ 解説・佐藤亮一 2002）。

語彙⑤の新しく追加したシバレルも語彙④と同様と解釈される（安部）。

語彙①～⑤のこれら 5 図および語彙⑥語彙⑦は、特に気温の低さや冬季の雪の多さ等の寒冷地気候に関わるという点で共通性が認められる語彙である。

語彙⑥語彙⑦は、安部清哉（2004）「地名と日本語——河川地形名の言語空間」で取り上げているが、語彙⑥語彙⑦と語彙①の「雪焼け」は認知的な類型も認められるものである。同じ語源の語が北日本において、「寒冷地特有の事物・現象へ意味的に有標化する」というパターンが見られる（安部 2004）。例えば、次のように、同じ語源の語形が、北方では寒冷地特有の意味に特化するという興味深い傾向を示している。（／の後者が北での意味、カタカナは方言語形）

フキ（吹き）〔風／吹雪〕、ユキヤケ（雪焼け）〔日焼け／凍傷（霜焼）〕、サワ（沢）・スガ・シガ（氷）（これらは「水・川」の意の同源である）〔川・沼沢／氷・氷柱〕

語彙⑧アユの風は、方言研究では古くから日本海沿岸分布として知られているもので、日本海航路による伝播によると考えられてきたものである。

語彙⑨語彙⑩の地名分布は、その分布が日本海側および北東北の太平洋側に及んでいて、地理的に、気候境界線の北部に偏るといった典型的な分布をなすと考え、追加したものである。語彙⑨の「荒町」は、表記上「新（あら）町」（地域的偏りはない）と対比されるもので、新開地（つまり元は荒地）が荒涼なる未整備地として受け止められやすかった寒冷な北方の傾向を示す可能性がある。語彙⑩はその地名の今後の語源解釈によって解釈が可能になる余地がある。

語彙⑪語彙⑫は最近見出したばかりのものであるが、特に語彙⑪の南北での相補的分布は語彙では珍しく、典型的な境界線を示す。

語彙⑨～⑫いずれも、現時点での解釈は未詳という段階である。しかし、「ネマル」も指摘した当初は一例であったが、その後、類似事例の追加によって解釈が可能となっている。分布は顕著な特徴を示すので、今後類似の事例が増えれば類型的な傾向が見出せる可能性が高い。

## 2-2 南北型方言分布の語彙 各論

### 2-2-1 (1) 語彙⑥ ▲「フキ (吹雪)」(安部 2001.3・安部 2007.3, SDJD 安部作図)

最初に少し長くなるが、語彙⑥について解説する。まず結論を述べておけば、これは、南日本ではただの風を現した語形フキが、北日本では、雪混じりの風である吹雪を指して使われているようになったものである。やはり雪の多さと関連している語であることがわかる。

◆注：「フキ」は、安部清哉（2001.3）「書評 迫野虔徳著『文献方言史研究』『国語学』52-1の注においてその分布の特徴に言及し、安部（科研）で取り上げている。

#### 2-2-1 (1) - a フキの北部日本分布

吹雪を表すフキという語形は、『日本方言大辞典』によれば主に東北・北陸（新潟）と山陰に限られ、南北境界線の北方分布になる（◆図の語彙⑥参照）。『日本方言大辞典』だけでその範囲を特定するには資料不足であるが、この地域は柴田氏が「霜焼け」の分布で示したように多雪地帯であり、後述のように「風」の意味のフキが特に吹雪に特定される自然条件が認められるから、気候と意味とに相関性を認めることができる。

なお、吹雪の意味のフキが付く語形でも、愛知のフキマワシのみ、南北線の南側になる点で例外になる。これは、近くに旋風の意味をもつフキマワシもあるので（LAJ264 図「旋風」参照）、旋風のフキマワシが乱れた風の一つとして拡大したものであろう。『日葡辞書』補遺フキマワシがあ

り、旋風の意味のみあって吹雪の意味がもとはないことがわかるから（安部 1986）、この地のフキマワシは後代に吹雪に意味拡大した新語と推定できる。

歴史的にはフキは、上代からある動詞フクの名詞化語形であり、当初は、風などが吹くことを表す一般称として生れたものであろう。『日本国語大辞典』では、初出として『後撰和歌集』の風の例が挙げられているが、名詞形は上代からある動詞フクとともに古いであろう。風が吹くことの一般称的名詞が、吹雪に限定されて北日本で方言化したと解釈される。この北方地域は、安部（1999.9）でも示したように、冬季の降雪日数が長く降雪量も多い。冬が長い地域の風が、冬季に多く雪混じりの特徴をもつために自然に意味が限定されたというわけである。このような分布と意味の関係から見て、『日本方言大辞典』によるフキの分布は、吹雪の意味での使用範囲をほぼ投影していると見てよいと思われる。

## 2-2-(1)-b 文献資料におけるフキ

ところで、このフキの文献例を方言として問題にしたのは、迫野虔徳（1998）が最初であろう（安部 2001）。文献例は、迫野（1998）が挙げる室町末期『梅津政景日記』の例が現在もっとも古く、以下、近世の東北方言書になる。指摘されている『仙台浜荻』『庄内浜荻』『御国通辞』に方言としてフキがあり、『御国通辞』では江戸詞としてフブキがある。それから、

- ①吹雪としては南北境界線以北は古くはフブキではなくフキであつたらしいこと、
- ②フブキは南側の語形であること、
- ③フブキは少なくとも近世後半でも江戸語形であつて、南北境界線の北の語形ではなかつたらしいこと、

がわかる。北方地域にフブキが浸透しておらず（海岸部は別として）、そ

の古さが推定されるフキのみであることは、フキ（吹雪）の分布は、この語の歴史とこの地域の気候特徴と共に古かろうことが推察される。

では、フキの意味を吹雪に特定し得なかった雪の比較的少ない南側の地域では、なぜフブキという語形を生み出したのであろうか。おそらく、重複形のように見えるフブキは、意味的強調の語形である他の重複形と同じように（トマル<トマル止、ツヅク<ツク付、ククル<クル等）、フキの意味的強調形として「強い風」の意味を担うことになったのであろう。一方、動詞が普通に名詞化したフキでは、普通称的「風」の意でしかなく、冬季でも日常的でない吹雪という印象強い特定現象を担わせるだけの特徴が、その形態になかったためではなかろうか。

反対に、北の地域では、冬季が長く吹雪は日常的だったので、古語形のフキでも十分だったのであろう。

ところで、フブキという語形そのものは、南側でも、後になって、雪混じりに吹く風を特定する呼称が求められるようになった段階で、例えば「吹き吹き」あるいは「降り吹き（雪などが降りながら風が吹くこと）」などから発生したものと考えられる。

文献資料において、名詞フブキは12世紀前半の『堀河百首』（日国）、1187年『千載和歌集』（岩波古語）の例がある。動詞形フブクも『蜻蛉日記』『更級日記』（共にフリフブク）『源氏物語』（フキフブク）（日国）の例があるから、名詞形も平安半ば近くまで溯る可能性がある。

なお、名詞形フリフキは未見であるが、動詞形は、フリフク（『和泉式部日記』）よりも、フブク（フリフブク、『蜻蛉日記』『更級日記』）の方が若干早く現れており（『日国大』）、降り吹くより、連用形完全重複形の「吹き吹き説」（あるいは語幹フの部分重複による「吹・吹ク説」）の可能性が高いか。重複形が意味的に強調になるという点でも吹雪にふさわしく、また、この時期に重複形が多くなるという傾向（蜂矢真郷1998）とも時期的にも一致する。

東におけるフブキの例は『梅津政景日記』の1例の報告があるが(迫野1998)、関東の日常語か、畿内語の影響であくまで武士階層の書き言葉的教養語かは、現段階では不明である。もし関東の日常語であったとすれば、フブキの東への浸透は比較的早かったことをうかがわせる。

文献資料のフブキについての、より詳細な調査は今後の課題である。

## 2-2-(1)-c まとめ

以上から、現時点でのフキ・フブキの語史をまとめると、上代から動詞形のある連用形名詞フキは、雪が多い冬の長い地域では、自然に吹雪を指す特定称として定着したであろう。一方、南側でのフキは、吹雪に使用されることもあったろうがあくまで風の意に留まった。フブキの方は、遅くとも中古半ばには、フキの重複語形ないし複合語として生まれ、吹雪を指す特定称になった。やがて東側に伝播拡大し遅くとも近世後期には江戸まで広がった。しかし、フブキが北関東以北でフキに取って代わることは遅く、フキは古くからのその分布を北方方言としてよく留めた。それが『日本方言大辞典』の地域であった。概略、このような歴史が考えられる。

## 2-2-(1)-d 【フキの参考文献】

安部清哉(1986)「〈旋風〉の変遷における方言分布の四つの層」『フェリス女学院大学紀要』23

迫野虔徳(1998)『文献方言史研究』清文堂

蜂矢真郷(1998)『国語重複語の語構成論的研究』

安部清哉(1999.9)「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35

安部清哉(2001.3)「書評 迫野虔徳著『文献方言史研究』」『国語学』52-1

## 2-2-(2) 語彙⑤ ▲「シバレル(凍)」(『日本方言大辞典』SDJD)

により安部作図)

語彙⑤は、安部 (1999.9) に挙げた「シミル」からの類推によって、見出したものである。『日本方言大辞典』(『改訂日本国語大辞典』も同じ)における報告地域は、必ずしも十分な情報量ではないが、冬季気候に関係するその意味とこのシバレルと、すでに南北分布と解釈されているシミルとのb-m交替形という形態的関連性を考慮して、「南北型」の分布をなすものと解釈した。

2-2-(3) 語彙⑦ ▲「シガ・スガ(氷)」(LAJ261 図「氷」・262 図「氷柱(つらら)」)

語彙⑦の氷および氷柱(つらら)は「水」に関わる現象でもある。語形「シガ・スガ」類は、日本語の河川地形名体系において、「サワ(沢)」と同源(諏訪湖の「スワ」も同源)と解釈できる水源関係語彙の1つである。

河川地形名サワ(沢、古語サハ)も東日本に偏るが、シガ・スガは、それら水の同源語形が、特に東北・北陸などの北方の寒冷地において、寒冷地特有の現象である「氷った水」の意味で有標化され、氷・氷柱を表す語形として特定されたと解釈できる。

サワとスガ・シガが同源であることなどについては、安部(2004.7)、あべせいや(2004.12)を参照されたい。

なお、「氷」「氷柱」における該当語形としては、次のような語形も対象として考慮した。

「氷」——スガ(マ)、シガ(マ)、シミ、これらの転倒語形と解釈し得るガサ・ガスも加えた。

「氷柱」——スガ(マ)、シガ(マ)、スガンボー、スゴ(一)リ、スグリーンボー等。

2-2-(4) 語彙⑨ ▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克 1984)

「溜池を表す『～堤』」の地名分布は、鏡味明克 1984『地名学入門』が「日

本海共通地名型」(p.54) という名称で挙げていたものを、今回新たに見出した。

「堤」がなぜ日本海型分布をなすのかは未詳である。日本海交易による地名拡散と見るとしても、多くの語形が伝播拡散したであろう中で、なぜこの語形が、特に日本海沿岸地域に限定的に残存したのかの説明が求められよう。

鏡味氏には、語形の由来と分布理由についての解釈は見られない。一方、次のように音声的分布パターンとの類似を指摘している。

「このような日本海方言的な潟や堤（九州以外）の分布は日本海方言的母音地域（たとえば『日本語地図』第一巻に見られる「ひげ」をフゲ、東の「シ」が [si] [fi] (p.58) などの地域）とかなり重なりあう。」

鏡味氏は、地名の分布パターンと方言音声分布の類似に着目していたことがわかる。「南北型」が、従来言われてきた俚言・語彙現象だけでなく、音声現象にも類似例があることを示唆したものとしては、管見の限りでは、最初のものである。(3-2-(3) 音声⑦「u < i (フガシ(東)・フゲ(髭))も参照)

なお、鏡味氏は、同様の分布として「潟」も挙げておられるのであるが、「潟」の方は和歌山、千葉、鹿児島など太平洋側の分布が少なくないので本稿では保留した。

## 2-2-(5) 語彙⑩ ▲▼地名「アラマチ（荒町<新町）」(鏡味明克 1984)

語彙⑩は、鏡味明克(1985)『地名が語る日本語』(南雲堂)から見出したものである。

「新町」が北部日本でなぜ「アラマチ（荒町）」と解釈されるようになるのかは、いまのところ明らかではない。その点で、一連の南北型方言分布

境界線と一緒に解釈するには慎重である必要があるかもしれない。一方、その境界線が極めて明瞭であるので、この北部地域の特徴を検討する上で看過できない地図と考えここに追加しておくことにした。

一つの可能性としては、「アラマチ」（荒町）は「新町」と対応しているものとされるので（鏡味明克（1985））、新規に開発・開拓された地域名としての「新町」が、寒冷な北方地方では、まだ十分に整備されていない荒涼とした場所にできた地域「荒れた町」と認知されたことによる、という民俗学的な解釈の可能性もある。類似方言例や、類似の民俗学的現象を見出して比較するなど、今後の検討を要する。（ちなみに、筆者の郷里・仙台市市街地にも「荒町」があったが、旧市街の周辺に位置するからやはり「新町」の意識と関係するか。）

## 2-2-(6) 語彙⑪ ▲▼「天の神様－神様」（選り歌の歌詞）（石井聖乃 2003）

「選り歌」は、“どちらにしようかな…神様の言うとおりに”というかたちで全国的に残る唱え唄を指す。石井聖乃（2003）によってこの歌詞の貴重な全国分布が明らかになっている。

この歌詞において、「神様」（の言う通り）か「天の神様」かの相違が、南北で綺麗な相補分布をなしているのが見てとれる。石井聖乃（2003）では、これを南北型の相補分布とは解釈していないようであるが、興味深い対応である。「天の～」の方が「天にまします我が～」のような感覚に通じ、新しいもののようにも思われる。また、語彙⑩の「荒町－新町」とも関わるような、何らかの民俗学的気質の相違を投影している可能性もある。

現時点では、対比的相違の理由をただちに断定しがたいが、類似の現象を見出したことで解釈が進んだ文法①「ネマル」のように、類似事例を収集していくことで解釈の糸口を見出したい。

### 3 音韻における南北型方言分布の解釈

#### 3-1 南北型方言分布の音韻 概観

南北型方言分布境界線における音声上の相違には、次のものがある。

□音声 (唇音化, 口蓋化, 喉頭化等の音声現象に関わる事例が多い)

音声① ▲▼「ボウーオウ (追)」の〔唇音 bo - 母音 o〕(唇音化) (LAJ147 図「鳥追い歌」・189 図「鬼ごっこ」) (安部 2008.3)

音声② ▲▼地名「bu - u 対応」〔budo 葡萄 - udo・uto 宇藤・宇都〕(唇音化) (安部 2008.3)

音声③ ▲▼「キツーヒツ (櫃)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化, 喉頭化) (安部 2009.3)

音声④ ▲▼「スッカイスッパイ (酸)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化, 喉頭化) (LAJ41 図「酸っぱい」, 安部 2009.3)

音声⑤ ▲▼「アクト対ア (フ) ド (踵)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化, 喉頭化) (LAJ129 図「踵」, 安部 2009.3)

音声⑥ ▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化 (ヒェ・ヘ)」(口蓋化) (「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑦ ▲▼「u < i (フガシ (東)・フゲ (髭))」(口蓋化) (LAJ11 図「東」・12 図「髭」, 鏡味明克 1984)

音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域 / zi /」(口蓋化) とそれ以外の地域 (「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑨ ▲▼開音合音の残存における母音の広狭の南北 (▲開音が広母音 a : / ɔ :, ▼合音が狭母音 u :) (「日本方言音韻総覧」掲載図)

□アクセント

アク① ▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域▲と変化しない地域▼ (口蓋性・唇音性?) (真田信治 1989)

個々に簡単な解説を加えるが、現時点でのこれらに見られる共通性には次の点が指摘できる。

- A 唇音性に関わるもの A-a 「母音の b 音化 (破裂化)」 音声①②  
 A-b 「k (kw) - p 対応」 音声③④⑤  
 (k 音の側から見ると喉頭化)  
 A-c 「u < i」 「中舌音 < i, u」  
 (円唇性) 音声⑦⑧
- B 口蓋化に関わるもの 音声⑥⑦⑧

A-a 「母音の b 音化 (破裂化)」——南方方言の母音に対して、北方方言で b 音が現れる。(オウーボウ, ウドーブド)

A-b 「k (kw) - p 対応」——南方方言のカ行音に対して、北方方言でハ行ないしパ行が現れる。(キツーヒツ, スカイスッパイ, アクドーアフト)

さらに、A の特徴は、唇音性の母音ウとオがその円唇性を強めた結果、破裂音 b へとなったと解釈されるなら、北方がより円唇性が強まるという点では、音声⑦音声⑧の現象、つまり、音声⑦イ母音がウ母音で現れる特徴、音声⑧イとウの区別が無くなる現象と同じ傾向として、次のように捕らえなおすことができるかもしれない。

A-c 南方の音声特徴に対して、北方方言でより唇音性が強まる特徴がある。

ただし、唇音性の強化は沖縄方言などでも指摘されることがあるので、その条件などを比較検討する必要がある。

音声⑥⑦⑧の現象は、中舌化も含め、別の角度から見ると口蓋化という見方もできようか。

アクセントについてはまだ詳らかでないが、音声の方の特徴のいずれか、ないし、いずれにも関わっている可能性がある。

## 3-2 南北型方言分布の音韻 各論

3-2-(1) 音声① ▲▼「ボウ-オウ (追)」の〔唇音 bu-母音 u〕(唇音化)  
(LAJ147 図「鳥追い歌」・189 図「鬼ごっこ」)(安部 2008.3)

「～ボイ (追い)」(b-φ 交替 (ボウ-オウ) の言語地図) LAJ189

「ボイ～ (追い)」(b-φ 交替 (ボウ-オウ) の言語地図) LAJ147

音声①は、『日本言語地図』189 図「鳥威し」の中の「鳥追い」を表す語形に現れる「～ボイ (追)」 「ボイ～ (追)」類の分布図である。「ボウ (追)」の分布の南側境界線が南北型方言分布境界線と判断される。それは「オウ (追う)」との対比で見るとより対照的で、「ボウ-オウ」の対応を示すと解釈できる。

これは、「bo-o」対応、つまり「b-φ (零)」対応である。この問題については、安部 (1998.2) 「和漢音積書言字考節用集」(『岩波日本古典文学大系月報』83) で触れたことがあるが、「唇音進化」と解釈するか「呼気」の強さととるか、今後の検討が必要である。注目すべきは、この交替が「南北型」の対応を示すという点である。

「唇音進化」がどの地域で特に顕著であるかという点に関してはこれまで地理的データがなかった。この地図は、少なくともこの現象の北方日本での範囲について示唆を与えてくれる。「呼気」に関わるとすれば、安部 (1999.9) で触れた『悉曇要決』「本朝北州其音濁麤矣。南州其の音柔也。」(日本では北方での発音が濁って荒く、南方での発音が柔らかく聞こえる) という記録とも、北方の有声音化という点で一致する面があり、その点でも注目される分布地図である。

3-2-(2) 音声② ▲▼地名「bu-u 対応」〔budo 葡萄-udo・uto 宇藤・宇都〕(唇音化) (安部 2008.3)

—— (唇音 bu - 母音 u) (唇音化) : 北部の唇音進化——

母音と b 音の対応事例として、3-2-(1) の音声①と同様の特性を背景にもつものと解釈できよう。

3-2-(3) 音声⑦ ▲▼ 「u < i (フガシ (東)・フゲ (髭)) (口蓋化)  
(LAJ11 図「東」・12 図「髭」, 鏡味明克 1984)

音声⑦は、鏡味明克氏が、地名「堤」の日本海型分布に類似するものとして指摘されている。

「このような日本海方言的な渦や堤 (九州以外) の分布は日本海方言的母音地域 (たとえば『日本語地図』第一巻に見られる「ひげ」をフゲ, 東の「シ」が [si] [fi] (p.58) などの地域) とかなり重なりあう。」(鏡味明克 1984)

この指摘を受け、安部 2003.3 において、「u - i」(髭および東) の対応を「唇音性」という共通性に着目して「ボウーオウ」とも関連させて挙げたものであった。鏡味氏には、語形の由来と分布理由に関する解釈は見られない。しかし、円唇性の進化と見ると、音声①、音声②とも類似性が指摘できる。一方、口蓋化という点からは、音声⑧と母音 i・u に関わる点で共通する。3-2-(5) 口蓋化を参照。

3-2-(4) 「k - p」音韻対応

音声③ ▲▼ 「キツーヒツ (櫃)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化, 喉頭化)  
(安部 2009.3)

音声④ ▲▼ 「スッカイスッパイ (酸)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化,  
喉頭化) (LAJ41 図「酸っぱい」, 安部 2009.3)

音声⑤ ▲▼ 「アクド対ア (フ) ド (踵)」の〔\* kw - p 対応〕(唇音化,  
喉頭化) (LAJ129 図「踵」, 安部 2009.3)

これらは、「k (\* kw) - p」音韻対応の一連の現象と解釈される。こ

れらについては、安部 2009.3 を参照されたい。

### 3-2-(5) 口蓋化

音声⑥ ▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化（ヒェ・ヘ）」（口蓋化）（「日本方言音韻総覧」掲載図）

音声⑦ ▲▼「u < i（フガシ（東）・フゲ（髭）」（口蓋化）（LAJ11 図「東」・12 図「髭」，鏡味明克 1984）

音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域／zi／」（口蓋化）とそれ以外の地域（「日本方言音韻総覧」掲載図）

これらには、口蓋化という点での共通性が指摘できる。特に、音声⑦⑧は母音 i・u に関わる口蓋化という点で共通する。北方での口蓋化現象の傾向については、安部 2013.3 「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言の音韻対応から推定された紀元前 1 万年前の『呼気量変化』（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因について」において、その要因を解釈している。この 3 項目ともその発音の変化の影響を受けた口蓋化とも解釈できる可能性があるが、詳しい考察は機会を改めたい。

### 3-2-(6) アク① ▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域 ▲と変化しない地域▼（口蓋性・唇音性？）（真田信治 1989）

アクセントについては、唯一アク①の現象が指摘し得る。北方の特徴が、南方の房総半島と徳島に分布がある点が検討課題である。房総半島については、『古語拾遺』他に記録があるように、阿波忌部氏（徳島阿波）から安房（千葉県）に忌部氏の一部が分かれるなど、房総への歴史的な移住が認められる。さらに、この分布は、忌部氏族の古い出自が北方日本方言地域であった可能性までも詮索させる。いずれにせよ、この南北型方言の研究が、アクセントにおける相違までようやくたどりついたことの意義は小

さくないと考える。考察は後考を期したい。

## 4 文法における南北型方言分布の解釈

### 4-1 南北型方言分布の文法 概観

□文法（「aru 型動詞」の残存）

文法① ▲「ネマル」（LAJ51 図「座る」・52 図「あぐら（胡座）をかく」  
（安部 1999.9）

文法② ▲「オガル（生育）」（\*ogu < obu 生ふ +aru）（『日本方言大辞典』  
での使用地域により安部 2007.3）

文法③ ▲地名「カクマ」（かくまる（囿）< 囿む + aru）（鏡味完二  
1958）

文法④ ▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（平山輝男 1984 の図、  
安部 2008.3 指摘）

文法①ネマルは、安部 1999.9 では、気候の影響が明確な他の分布と同様に扱えるものか判断を保留していたが、安部 2008 において考察したように、文法②オガルや文法③カクマの解釈から、「古代動詞派生語形〔-aru 型〕の残存分布パターン」として、一連の現象として加えていくことにしたい。

### 4-2 南北型方言分布の文法 各論

#### 4-2-1 「[-aru 型] 動詞語形の北方型分布」

文法① ▲「ネマル」（LAJ51 図「座る」・52 図「あぐら（胡座）をかく」  
（安部 1999.9）

文法② ▲「オガル（生育）」（ogu < obu 生ふ +aru）（『日本方言大辞典』

での使用地域により安部 2007.3)

文法③ ▲地名「カクマ」(かくまる(囿) <囿む+aru) (鏡味完二 1958)

文法①ネマルは、安部 1999.9 ではその位置付けと解釈を保留とした。その後、分布が類似し、語形上にも類型が認められる事例を見出し、「古代動詞派生語形 [-aru 型] の残存分布パターン」を持つ現象と解釈することができた(安部 2008.3)。文法②オガル、文法③カクマ (<カクマル囿) も同じの [-aru 型] 動詞による語形であり、ネマルと共通すると解釈される(なお、オガルは、オフ(生)(ないしオブ生)の異形態としてオグ \* ogu を推定し、それに aru が融合した語形 [ogu + aru] と解釈する)。これらの語形は、類例が『万葉集』にも認められる古いもので、さらに、先行研究で東国語特有の語形として指摘されている点でも、北日本分布という地理言語学的特徴と密接に関連している語形であることがわかる。以下、解説する。

文法①は「ネマル」の残存分布地図である(安部清哉 1999.9, LAJ51 図「座る」・52 図「あぐら(胡座)をかく」による)。文法③は「地名「カクマ」」の地名分布図(鏡味完二)である。地理的特徴には共通性があり、南北型方言分布境界線以北の北方分布をなしている。

ネマル(横になる・寝る他の意味)は、関東から東北で使用される方言語形として有名であるが、北方に色濃く残存する。このネマルは、オガル(生育、大きくなる)・ウワル(植)など東北に多く残存する、語尾が現代語で「-aru」となる「アル型動詞語彙」と位置付けられる。それは上代の東国語特有語として既に指摘される(福田 1972) 東国方言の残存と見なせる。これらの語尾アルの語源は、動詞アリと同源である状態性の意味を付与する動詞化接辞アルと解釈できるものである。この残存分布は、その「古アル型動詞」および遡った語源である接辞アリの機能が、北方(ないし東国)

で基盤的特徴であったか長期的に強固であったことの名残と解釈される。

なお、この特徴的分布はその成立事情つまりアル型動詞の語構成ないし語源と関わるので、その解釈について触れておく。

これらの語形は基本的に、接辞アルが付いたものが、後代に四段動詞化したものと考えられる。「アル型動詞語彙」はネマル（安部 1999.9）・オガルなどの共通点から万葉集に類例を探し出したもので、福田（1972）がつとに 11 例指摘する「ホサル（乾）・ハラル（張）・ムカル（向）」等に遡及すると位置付けられる。福田氏は原動詞の活用語尾のア列音に複語尾が付いて、「事象の過程が存在することを表している、四段活用の複語尾」と見るが、ルの来源やア段になる文法的理由は未詳である。「ア列音にりがつuita ような形で表す」（旧全集本『万葉集』3351 頭注）と接辞りを想定する見方もあるが（りの説明はない）、岩波旧大系が挙げる aru との融合と見る解釈が妥当である。旧大系の例えば『万葉集』3351 頭注では「降レルの訛った形。降レルという形は Furiaru の ia という母音連続が ia → e という母音転化を起こして成立したものだが、ここでは ia → e という変化が起こらず、ia の i が脱落して Furiaru → Furaru という形になったとも見られ、また一般的に e → a があつたとも見られる。」とする。

ところでこのアルと同源と考えられる存在動詞アリの方は、古代語において様々な活用語で状态的機能性を派生させていく上で基礎的形態素として重要であった。例えば、助動詞のタリ（テ完了+アリ）、ケリ（キ+アリ）、ナリ（ニ+アリ）、メリ（見?+アリ）、ザリ（ズ+アリ）、ベカリ（ベク+アリ）、マジカリ、リ（←アリ）、動詞のヲリ（キ+アリ説）、ハベリ（ハヒ+アリ）、形容詞カリ活用、いわゆるタリ活用・ナリ活用など多くの活用語で確認できる。これらからは古代語文法上、基礎的活用語の最も初期の生産的機能を担っていたことがわかる。そのようなアリの機能が、東国で古くはアル型動詞として発展し（後に四段動詞化してアル型）、古態が残りやすい北方方言の特徴としてネマル・ウワル・オガル等の方言を温存

させたと解釈できる。アジアの類似の存在詞との比較は今後の課題であるが、この分布は古い段階の活用の特徴を間接的に留めた現象と解釈できる。二段動詞と対照させると、南北型方言分布境界線南北での二つの動詞活用の残存分布もやはり、アジアの方言分布の中において検討する必要があることがわかる。

この「[- aru 型] 動詞語形の北方型分布」との比較上、興味深い分布について、触れておく。この「[- aru 型] 分布」には、相補分布的な関係にあるもう1つの文法現象が指摘できる。次節で取り上げる文法④▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」である。

#### 4-2-(2) 文法④ ▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（平山輝男 1984 の図，安部 2008.3 指摘）

図 26 に示した「アル型動詞—下二段型動詞」は、古体を示す「下二段型動詞」の残存分布との相補分布の相補的狀況をわかりやすく示したものである。

図 26 の南方の範囲は、有名な下二段動詞の残存地域となっている。下二段の残存がこの範囲にあって古態の残存しやすい東北にないことはこれまで漠然と疑問視されていた。それはむしろこの活用の地理的特質と関わる。偏在的残存は、東北における古態残存のように、その地域における基盤的特徴ないし長期の強固な浸透を示す。その傾向から見て、この残存分布は二段動詞の成立基盤が北方でなく南方にあったことの現れである可能性が高い。二段動詞は、周知のように四段やアル型動詞の閉音節語幹と対照的に「開音節語幹」という特徴をもつ。この残存は開音節語幹動詞活用が北方よりもむしろ南方日本語に顕著な特徴であったことを示唆する。そして、開音節の特徴をもつオーストロネシア語がすぐ南に連なっていることを俯瞰して見ると、二段活用とその残存地域は、実は南の言語と関わってくる特徴を示すことが明らかとなる。

## 5 今後の研究課題

本稿では、日本語方言における「南北型方言分布」について、安部 1999.9 の 5 本以降に見出したものを改めて列挙し、語彙・音韻・文法毎に考察を加えた。

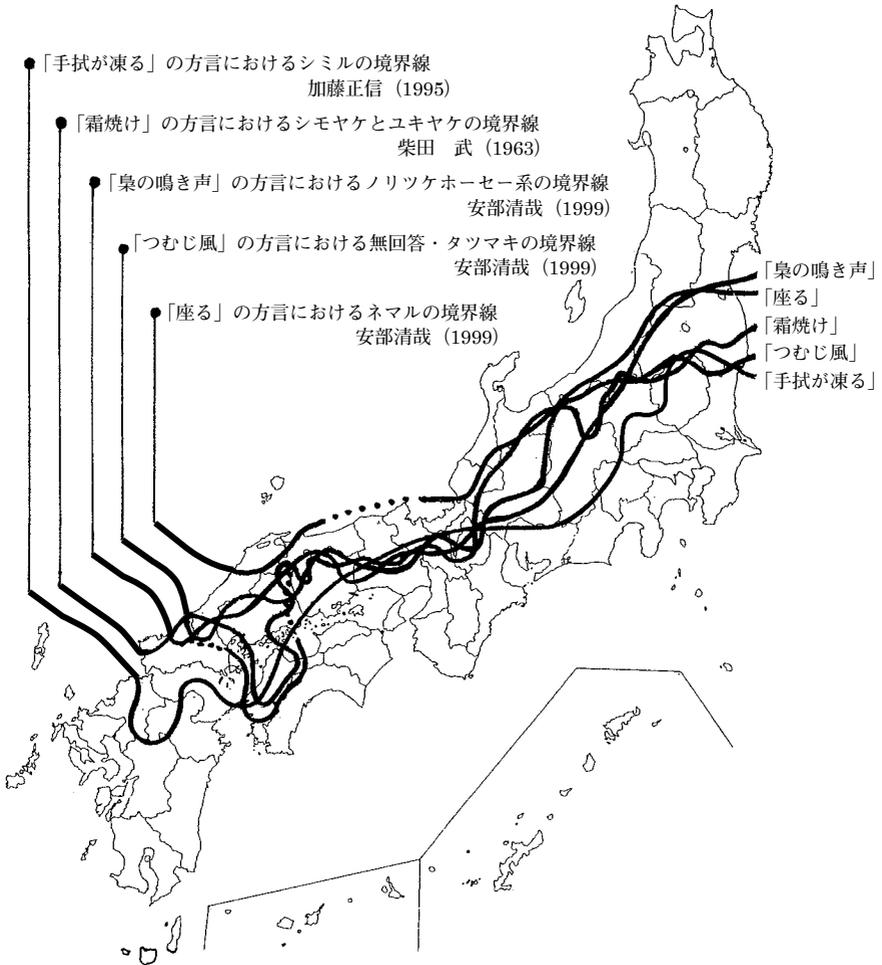
個別には、すでに詳しく論じているものもある。例えば、音声③④⑤のように、音韻対応「k - p」として、中国語、朝鮮語に共通してみられる現象と解釈したものもある（安部 2009.3）。語彙の語源（北方分布スッカイ）を中国語と同源と解釈し、従来の解釈を否定したものもある（安部 2011.3）。南北での相違が生じた要因を紀元前 1 万～7000 年に遡及するものと推定した現象もある（安部 2012.3）。

この南北型方言分布境界線は、気候の影響によるものであるので、東アジア、および、欧州大陸におけるインド・ヨーロッパ語（IE 語）にも認められることを、安部 2013.3『東洋文化研究』15において、世界で初めて指摘した。インド・ヨーロッパ語族でのこの境界線は、二分派、Centum-Satem の語派（方言）境界線となっているものである。これらの一致は、今後、東アジアの言語・文化とヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語および欧州文化の比較言語・文化論的研究が、重要な研究課題であることを示している。

さらに、アジアの南北方言境界線の背景には、文化的共通性がうかがえるモンsoon・アジア（MA）の領域があり、言語では類別詞（名詞類別詞）の分布がその範囲を象徴していた（安部 2008.3）。この領域内に特徴的な言語現象として、新たに、人称代名詞の用法における、待遇上の二人称使用回避用法をもつ言語の分布\*が指摘できる（\* WALS の言語地図 45 図における日本語、朝鮮語、ベトナム語、タイ語、インドネシア語、ビルマ語、カンボジア語（クメール語）。Figure C 参照, <http://wals.info/>

feature/45A#2/23.2/148.7。永田高志氏の2013年のご教授によるもので氏の近刊『対称詞体系の歴史的研究』参照。提示したFigure Cは、WALSの45図により、MAの境界線および北緯40度線を実践で加筆するなど一部加工してある)。この東南アジアから日本語・韓国語への伝播を推定させる「二人称使用回避用法 (Pronouns avoided for politeness)」のほか、「多種敬称用法 (Multiple politeness distinctions)」の地域も、一部の東欧での分布が見られるものの、そのほとんどはこのMA領域内に分布が集中していることを確認できる (Figure C中の黒丸●参照、Figure Cではこの2種類の区別がつかない)。モンスーン・アジア地域に特徴的言語現象として、これで、①類別詞、②二人称使用回避 (Figure C参照、二人称回避は永田氏のご教授によるが、図Cの領域における、より広い敬語法の特徴については1984年の小泉保氏の指摘が既にある)、③有声音・無声音の有標性の有無 (Figure D参照、③の特徴については鈴木豊氏の論文により見出し、地図は鈴木氏の私信によるご教示による) (②③いずれも詳しい解説は機会を改める) の3種を認めることができる。このMAでの言語現象は、その中での南北方言分布とも合わせて検討していく必要がある課題と考える。

本稿で示した日本語方言の地理言語学的解釈は、東アジア言語、および、インド・ヨーロッパ語との比較言語研究のための、基礎的一階梯である。今回十分な考察が及ばなかった南北型方言分布については、引き続き考察を継続していきたい。



図I 日本語の「南北型方言分布境界線」(安部)

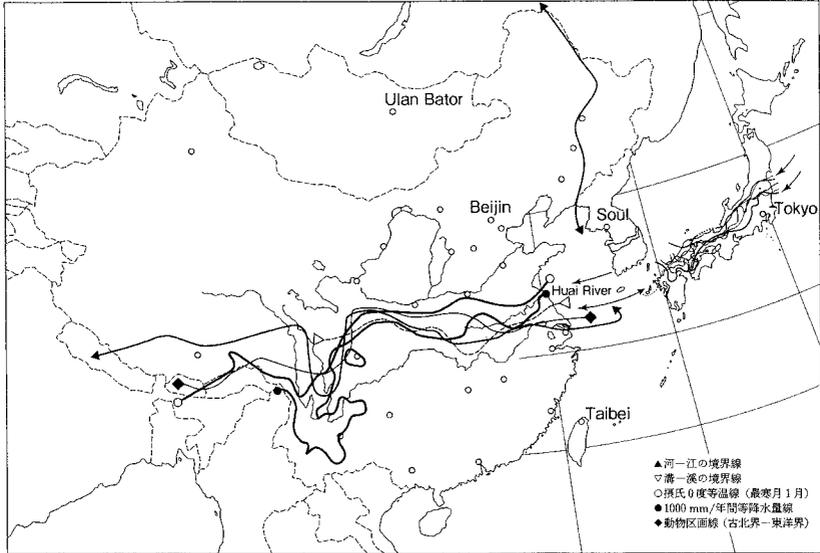


Figure A. Composite borders of languages, culture and climate in Asian region (ABE2013)

図A アジアにおける言語、文化、気候の複合境界線（安部）

- ▲-▲ North-south dividing line for the use of "he 河" and "jiang 江" in river names of China
- ▽-▽ North-south dividing line for the use of "xi(chi) 溪" and "gou(kou) 溝" in river names of China
- Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
- Isohyetal line at 1000 mm per year
- ◆-◆ Faunal realm (palaeartic realm - oriental realm)

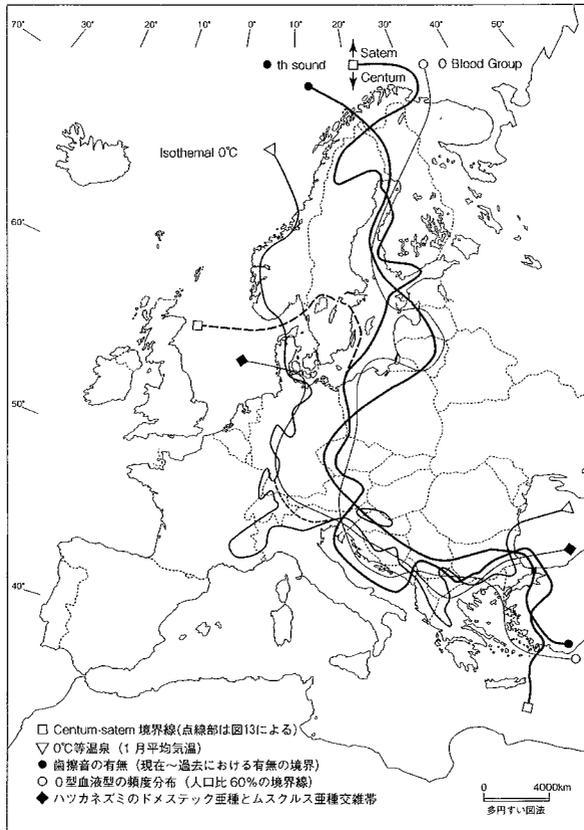


Figure B. Composite borders of languages, culture and climate in Europe (ABE2013)

図B ヨーロッパにおける言語，文化，気候の複合境界線 (安部 2013)

- Centum-Satem border (dotted line is the border with a different interpretation)
- ▽—▽ Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
- Presence of sibilance (the boundary lines of the presence current and past)
- Distribution boundaries of blood type O in 60% of population
- ◆—◆ Hybridization zone of *Mus musculus domesticus* and *Mus musculus musculus*

WALS Online-Feature 45A: Politeness Distinctions in Pronouns

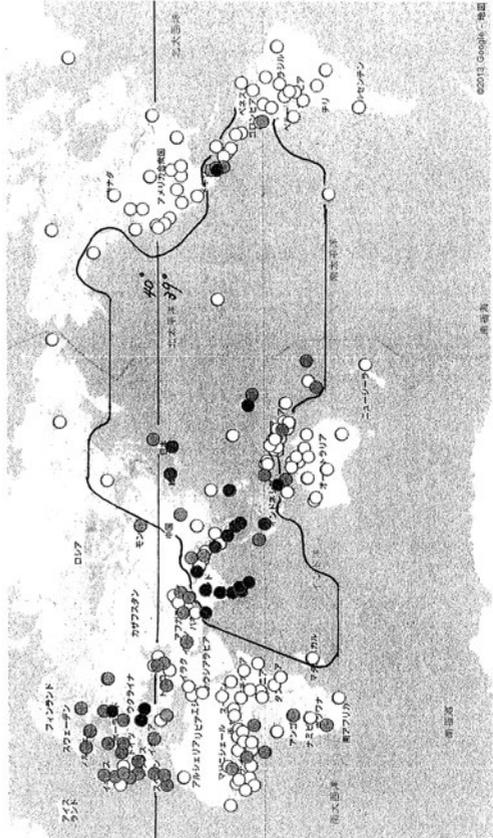


Figure C. Politeness Distinctions in Pronouns in Monsoon Asia. Pronouns avoided for politeness and Multiple politeness distinctions.



### Feature 4A: Voicing in Plosives and Fricatives

In chapter 4: Voicing in Plosives and Fricatives (<http://wals.info/chapter/4/>) by Jim Maddieson (<http://wals.info/authors/maddieson/>)

You may combine this feature with another one. Start typing the feature name or number in the field below.

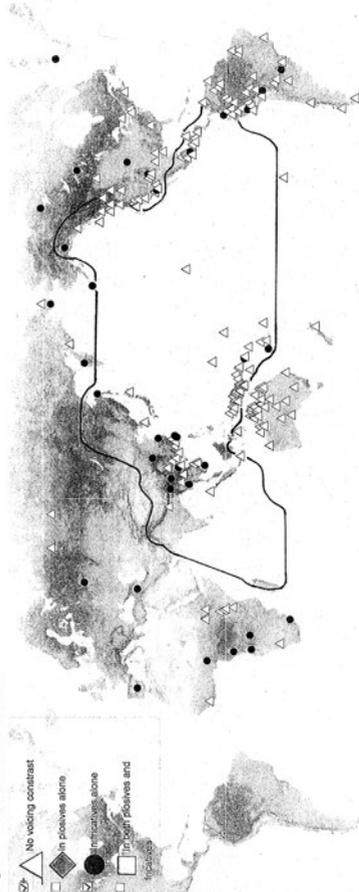
4A: Voicing in Plosives and Fricatives

#### Values

- No voicing contrast 182
- In plosives alone 189
- In fricatives alone 38
- In both plosives and fricatives 159

Legend icon size  Show/hide Labels

- No voicing contrast
- In plosives alone
- In fricatives alone
- In both plosives and fricatives



Values Examples

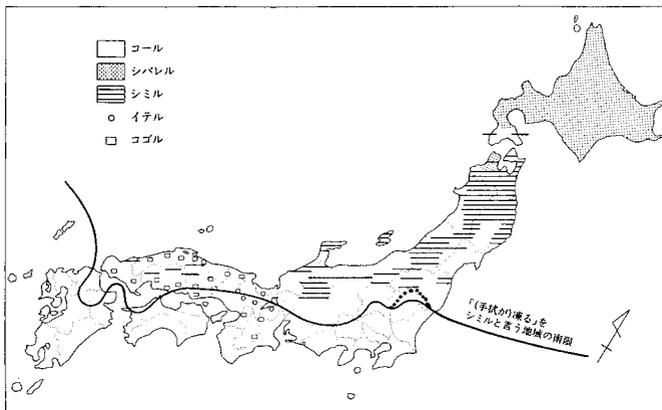
Figure D. Voicing in Plosives and Fricatives





○印は境界線の南側の分布地点を示す

図 語彙③ ▲「ノリツケホーサー・ノリツケホーソー (糊付干)」  
(LAJ298・299 図「梟の鳴き声」) (佐藤亮一 1986)



出典：『日本語地図』第2集 (1968), 96 図, 97 図による。  
……は安部の補正線

図 語彙④ ▲「シミル (凍)」 (LAJ97 図「(手拭いが) 凍る」) (加藤正信 1995)





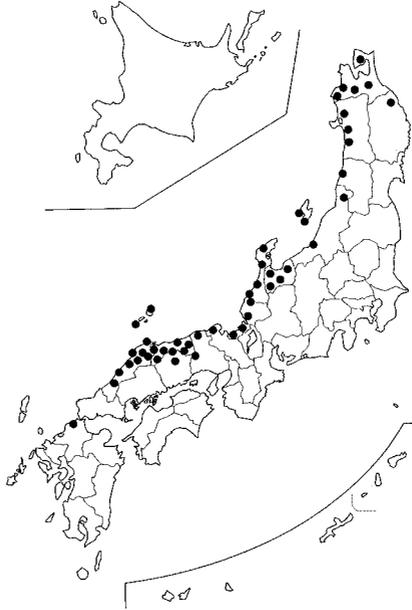


図 語彙⑧ ▲風向名「アヌノカゼ」(真田信治 1989 掲載図より)

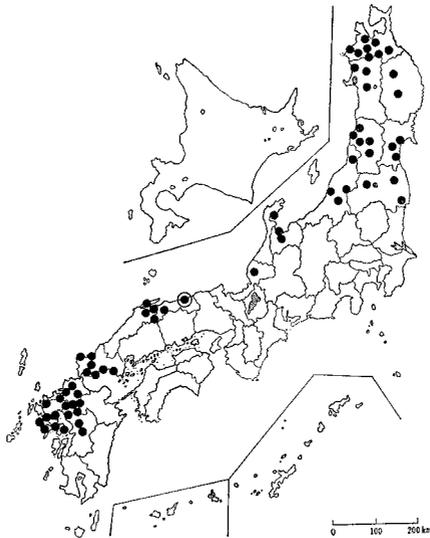


図 語彙⑨ ▲地名「溜池を表す『～堤』」(鏡味明克 1984)

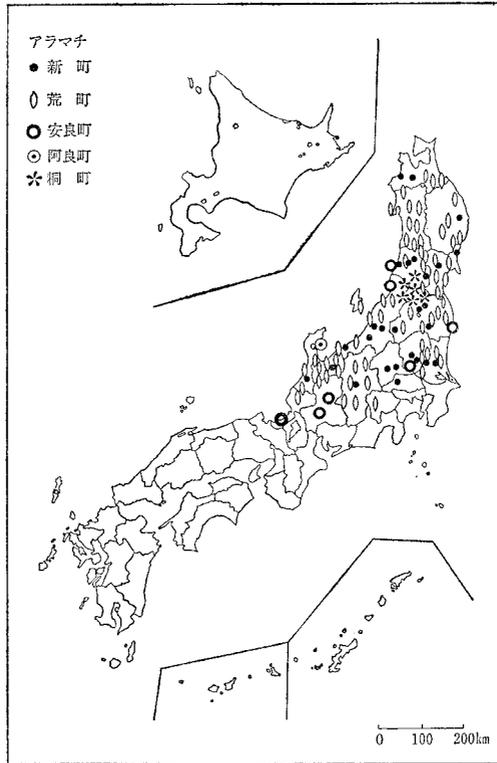
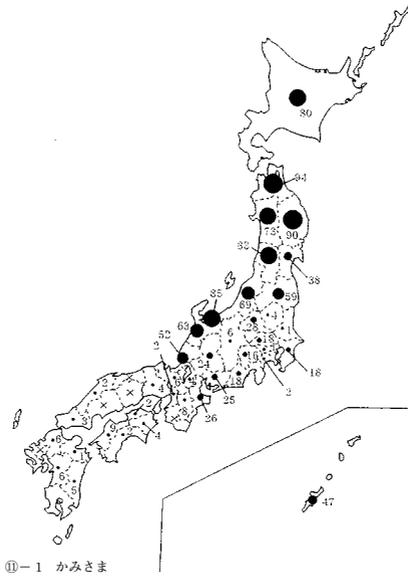
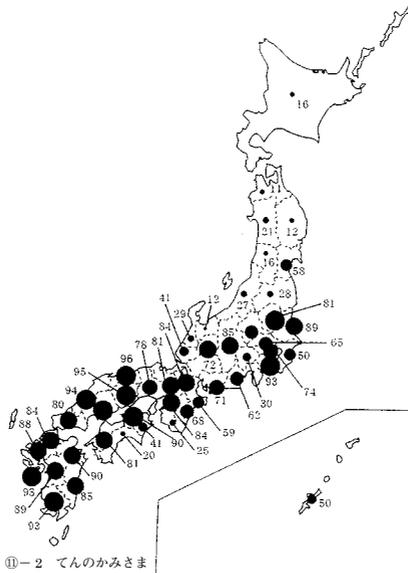


図 語彙⑩ ▲▼地名「アラマチ (荒町<新町)」(鏡味明克 1984)



①-1 かみさま



①-2 てんのかみさま

図 語彙① ▲▼「天の神様—神様」(選り歌の歌詞) (石井聖乃 2003)

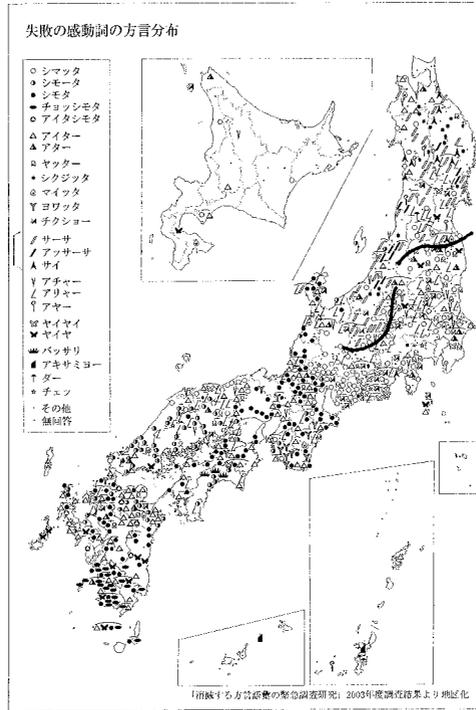


図 語彙⑫ ▲感動詞「サーサ・サイ」(澤村美幸 2011)



図 語彙⑬ ▲▼「カナ(糸)」(▲カナ-▼イト) (LAJ153 図「糸」・156 図「木綿糸」) (佐藤亮一 1986)

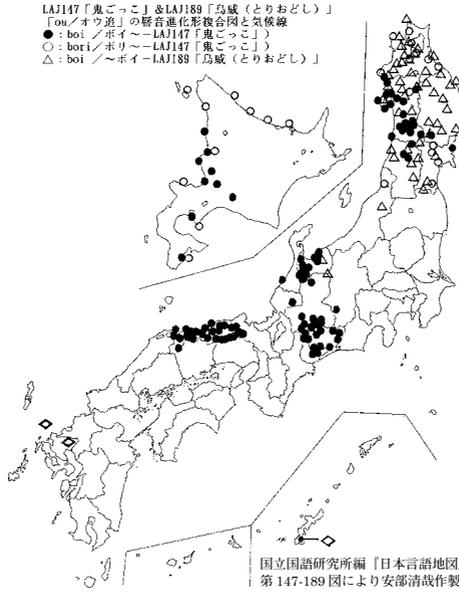
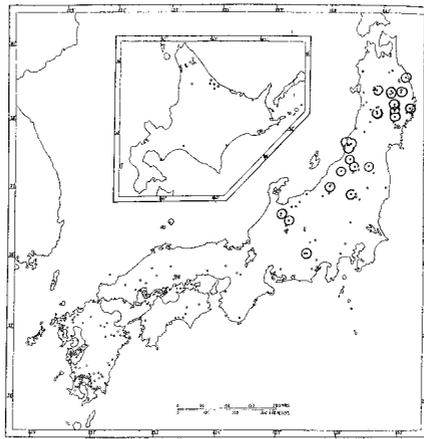


図 音声① ▲▼「ボウ-オウ(追)」の〔唇音 bo-母音 o〕(唇音化)  
(LAJ147 図「鳥追い歌」・189 図「鬼ごっこ」)(安部 2008.3)



圏点: Udô・Uto (宇藤・宇都), 「洞」「河谷」の意 Budô は東北日本  
 黒点: Budô (葡萄), をもつ地名。  
 ○にて加筆強調した。 鏡味完二 1958

図 音声② ▲▼地名「bu-u 対応」〔budo 葡萄- udo·uto 宇藤・宇都〕(唇音化)(安部 2008.3)

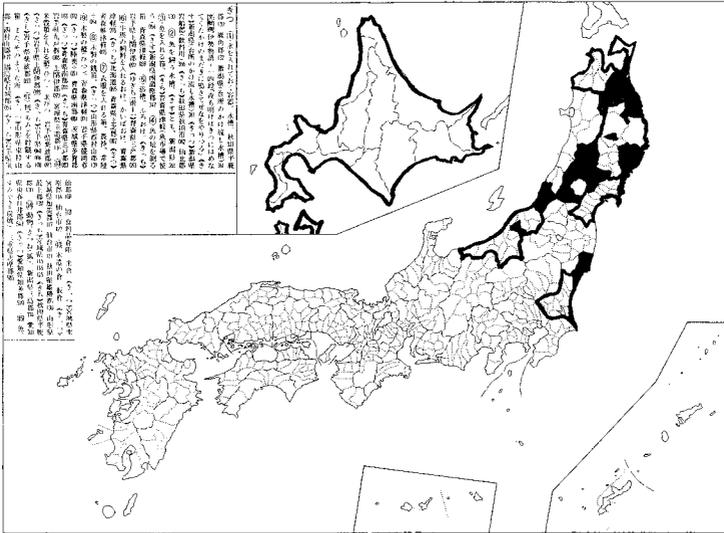


図 音声③ ▲▼「キツヒツ (櫃)」の[\*kw-p 対応] (唇音化, 喉頭化) (安部 2009.3)

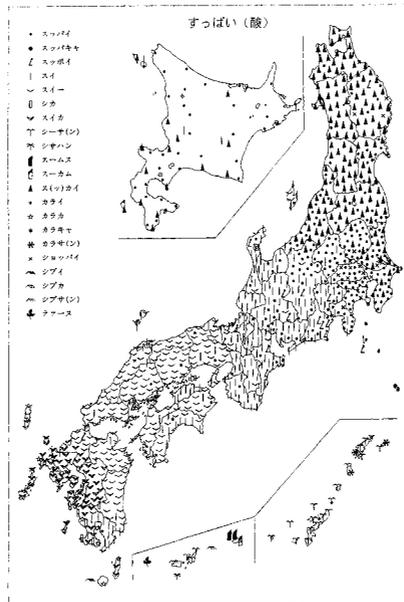


図 音声④ ▲▼「スッカイスツパイ (酸)」の[\*kw-p 対応] (唇音化, 喉頭化) (LAJ41 図「酸っぱい」, 安部 2009.3)



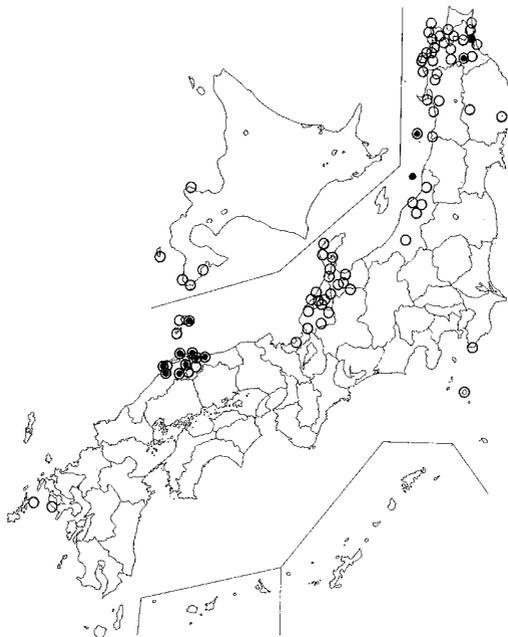
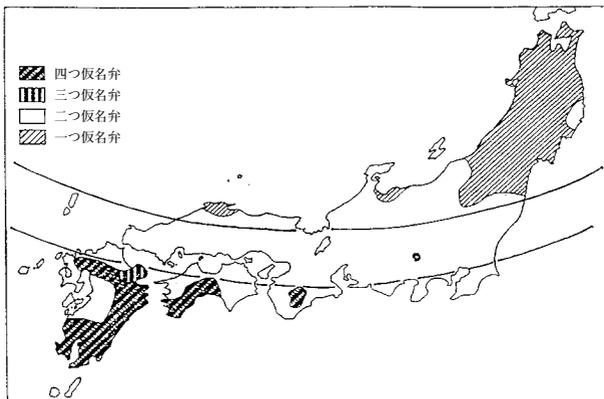


図 音声⑦ ▲▼「u < i (フガシ (東)・フゲ (髭)) (口蓋化)  
(LAJ11 図「東」・12 図「髭」より安部作図)



四つ仮名の発音による分類 (柴田武, 1964)

図 音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域 / zi /」(口蓋化) とそれ以外の地域  
(『日本方言音韻総覧』掲載図)

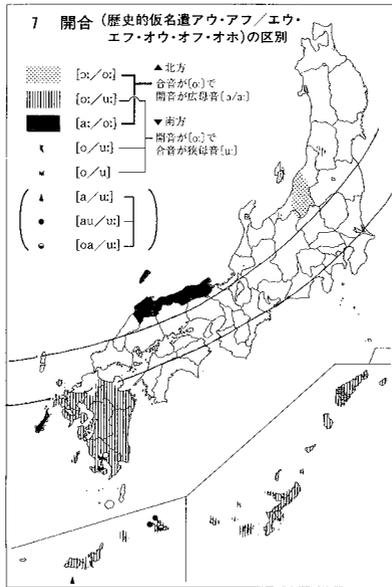


図 音声⑨ ▲▼開音合音の残存における母音の広狭の南北 (▲開音が広母音 a:/a:, ▼合音が狭母音 u:)  
 (『日本方言音韻総覧』により、凡例部分に一部加筆)



図② 母音の広狭によってアクセントが変化する地域  
 図 アク① ▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域▲と変化しない地域▼ (口蓋性・唇音性?)  
 (真田信治 1989) ※房総半島には、徳島・紀伊半島ほかからの歴史的な移住が認められる。



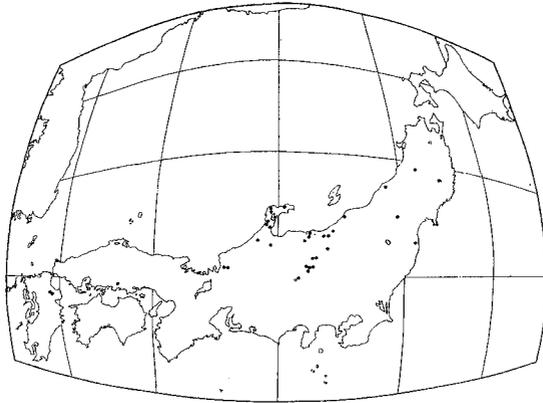
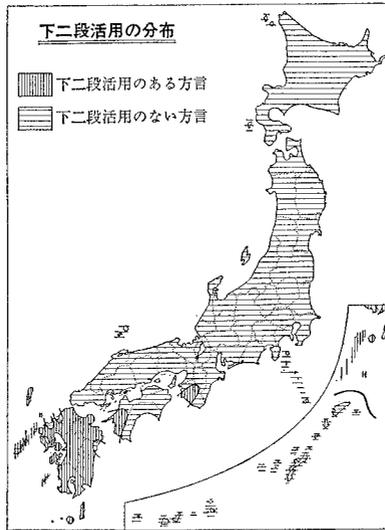


Fig. 141 Kakuma・Kakumi

視点：中部地方の中央、  
 眼高：600 km、  
 1方言：300×300km<sup>2</sup>。

Kakuma には谷頭に立地する例多く、「か  
 ぐる」(＝開まれる)の方言(秋田地方)に  
 よっているだろう。Kakumi は津軽方言で  
 「杓子」のことで、Kakuma と同様の地形  
 語として地名に適用されたものと考える。

図 文法③ ▲地名「カクマ」(かくなる(開) < 囲む + aru) (鏡味完二 1958)



著者の調査に「口語法分布図」を参照して作成した。

図 文法④ ▼「下二段(語幹開音節) 動詞の優勢残存」(平山輝男 1984 の図, 安部 2008.3 指摘)

**【補注】** 本稿に直接関連する「南北型方言分布」に関する拙論の構成を参考まで以下に簡略に示しておく。

- 1 全体的概説（定義・特徴などの解説）
  - 安部清哉（2013.2）「日本語方言における『南北方言分布』（語彙音韻文法）の特徴」『玉藻』47
- 2 該当地図一覧（2013.10 現在。地図が1頁大で見やすい。その後本稿の語彙⑬、音声⑨の2図追加で現在27図）
  - 安部清哉（2014.3）「日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧」『学習院大学文学部研究年報』60
- 3 個別地図の解釈（南北型方言に関する最初の拙論のみ。他は略）
  - 安部清哉（1999.9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35
  - 安部清哉（2009.3）○安部清哉（2011.3）○安部清哉（2014.3）
- 4 アジア、ヨーロッパの方言分布との関連性
  - 安部清哉（2007.10）○安部清哉（2013.3）
- 5 文化、気候、呼気量などの諸現象との関連
  - 安部清哉（2006.3）「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”（摂氏0度線）——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52
  - 安部清哉（2012.3）「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因について」『人文』10, pp.7-39.
  - 安部清哉（2013.5）「気候は、言語・方言を作るか？——アジア言語の“Centum-Satum 的基層語派”を区画する地理的指標となるか——」『日本語学』32-6（409号、2013年5月号）

### 【参考文献】

- 安部清哉（1999.9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35
- 安部清哉（2001.3）「書評 迫野虔徳著『文献方言史研究』」『国語学』52-1
- 安部清哉（2002）「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”——」『グロータース神父記念論集 言語地理学の課題』明治書院, pp.236-250

- 安部清哉 (2004.7) 「地名と日本語——河川地形名の言語空間——」『国文学解釈と鑑賞』69 - 7
- あべせいや (2004.12) 「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15, pp.42-54, 明治書院
- 安部清哉 (2006.3) 「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”(摂氏0度線)——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52
- 安部清哉 (2007.3a) 『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究(平成15-17年度科研費(基盤研究(C)成果報告書))』, pp.210., 私家版
- 安部清哉 (2007.3d) 「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究(共同研究プロジェクト概要)」, 学習院大学人文科学研究所『学習院大学人文科学研究所報2006年度版』pp.27 - 36
- 安部清哉 (2007.10) 「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x - p)」王鉄橋・「女+兆」灯鎮主編『国際化視野中的日本学研究——紀念胡振平教授從教授45周年(東亜日本学国際検討会論文集)』(洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集) pp.31-39. 天津・南開大学出版社
- 安部清哉 (2008.3) 「アジアの中の日本語」『方言の形成(シリーズ方言学1)』pp.123-167, 岩波書店
- 安部清哉 (2009.3) 『『きつ(にはめなで)』(『伊勢物語』十四段)の日本語方言及びアジア言語の中の位置』『国文学言語と文芸』125, pp.37 - 58. おうふう社
- 安部清哉 (2011.3) 「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立——「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源(中国語「酢」)の再検討——」『人文』9, 学習院大学人文科学研究所, pp.7 - 34.
- 安部清哉 (2012.3) 「東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』(口腔鼻腔流出量比率変化)とその要因について」学習院大学人文科学研究所『人文』10, pp.7 - 39.
- 安部清哉 (2013.2) 「日本語方言における『南北方言分布』(語彙音韻文法)の特徴」『玉藻』47
- 安部清哉 (2013.3) 「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二大分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15 (学習院大学東洋文化研究所)
- 安部清哉 (2013.5) 「気候は、言語・方言を作るか?——アジア言語の“Centum-Satum”の基層語派“を区画する地理的指標となるか——」『日本語学』32-6 (409号, 2013年5月号)

- 安部清哉 (2014.3) 「日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧」『学習院大学文学部研究年報』60
- 石井聖乃 (2003) 「えらび歌の地域差に関する調査研究 (研究ノート)」『東京女子大学言語文化研究』12
- 大橋勝男 (2008) 『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
- 大橋勝男 (2008) 『太平洋沿岸方言音声の研究 上・下』おうふう刊
- 大林太良 (1986) 「東アジアの文化領域論」埴原和郎編『日本人の起源』小学館
- 鏡味明克 (1984) 『地名学入門』大修館
- 鏡味明克 (1985) 『地名が語る日本語』南雲堂
- 加藤正信 (1989) 「現代日本語 方言」『言語学大辞典』「日本語」三省堂
- 迫野虔徳 (1998) 『文献方言史研究』清文堂
- 佐藤亮一 (1986) 「方言の語彙」『講座方言学 1 方言概説』国書刊行会
- 佐藤亮一監修 (1991) 『方言の読本』小学館
- 真田信治 (1979) 「標準語の地理的背景」『日本の方言地図』, 中公新書
- 真田信治 (1981) 「日本海型方言分布パターン」『言語生活』360, 筑摩書房。図はいま、  
真田 (1989) 『日本語のバリエーション』, アルク社による。
- 真田信治 (1989) 『日本語のバリエーション』アルク
- 澤村美幸 (2011) 『日本語方言形成論の視点』岩波書店
- 柴田 武 (1962) 「単語の全国分布」『人類科学』15 新生社
- 柴田 武 (1964) 「方言の源流をたどる」『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』第四章五,  
平凡社
- 徳川宗賢 (1979) 『日本の方言地図』中公新書
- 橋本萬太郎 (1981) 『現代博言学』大修館書店, 初出は図B 1978・図A 1980
- 蜂矢真郷 (1998) 『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
- 福田良輔 (1972) 「東国方言の国語史的意義」『万葉集 [II] ——言語と歌論—— (大東急記念文庫文化講座講演録) 大東急記念文庫, 「複語尾る——カハル (交フ), サハル (サフ), カカル (懸ル), ほか」]
- 馬瀬良雄 (1992) 『言語地理学研究』桜楓社
- 室山敏昭 (2001) 『アユノカゼの文化史—出雲王権と海人文化』, ワン・ライン (出版)

【訂正】安部 (2013.3) 『東洋文化研究』15 における以下の音韻変化の部分 (499 頁) を点線部のように修正いたします。(問題点をご指摘下さった土田滋先生に深謝致します。)

○安部 (2013.3) 「日本語およびアジア言語における「南北方言境界線」から見たインド・ヨーロッパ語族二分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15

「9-1 Centum-Satem の音韻対応からみた日本語の2つのサ行音と2つのカ行音の可能性

……「アメーサメ交替 (雨)」と言われていまだ定説がないなぞの「s」を指摘しておきたい。……古代のアメーサメ交替の正体として、[\*k<sup>h</sup>ame - same] という新たな仮説を提示する。…

**修正**      k<sup>h</sup>(=k') > k' > kj > k<sup>h</sup>j > <sup>h</sup>s' > s' > s

(修正前) k<sup>h</sup>(=k') > k' > k'j > k<sup>h</sup>j > ts' > s' > s      」

以上

【付記】 本稿は2013年度東洋文化研究所一般研究プロジェクト（代表：安部清哉）の研究成果の一部である。